
戦国無双 甲斐の獅子

マサムネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国無双 甲斐の獅子

【Nコード】

N2376P

【作者名】

マサムネ

【あらすじ】

時は戦国時代、己が野望を果さん者、己が信じる者、愛する者のために命を賭けて熱く駆け抜けた時代である この物語は甲斐の国の武田家で忠実では生まれるはずも無い武田信玄の子がこの戦国を駆け抜けた物語である。

序章

俺は、今可笑しな状況に堕ちている。

俺の周りは今、明かりも一切無い真っ暗なところにいて体の自由も利かない

などと暢氣のに考えていたら行き成り辺りがいきなり眩しく光出し

俺はおもはず

「おぎやあああああああ！「なんだー！ー！ー！」」

ん？ なぜ俺は赤ん坊の声を出しているんだ？

「奥方さま、おめでとうございます。立派な男の子です」

「まあ、あのひとそっくりで立派そうな子だは」

誰この優しそうで綺麗な女の人は。 てか、デカッ！

などと考えていたら俺は軽くもち上げられてしまった。

ふと自分の体をおそろおそろ見てみるとなんと俺の体が赤ん坊になつていた

「おぎやあああああああ！「なんじゃこりやー！ー！ー！」」
すると襖が開いた。

「紫音「シオン」よ生まれたかね！？」

「ああ、お前様ええ元気な男の子ですよ」

おお、なんかすごくダンディーな人だなー でも、この声どこかで聞いた声なんだけど？ そんなこと考えていたらお前様「？」がいきなり俺を抱えた。

「ほおれー父だぜー」

などと、とてもそのダンディーに似合わず 満面の笑みで俺あやしていた

「お前様早くその子に名前を授けてくださいな」

「おっ そうじゃった いやはやついうれしくてなーすっかり忘れてたわ

「がっははははは」

などと壮大に笑っている。もしや、この人はと俺の頭の中で確信ではないがこの人はと考えていると行き成り上にあげられそして、

「この武田信玄の子で、これからお前の名は武田刹那となすけようぞ」

「おぎやあああああ！」「やつぱりー！？」

「まあ、とつてもいい名ですは、これからよろしくね刹那」

「刹那よ、わし見たいにカツコよく育つのじゃぞ」

おぎやあああああ！」「まじでー！ー！ー！ー！？」

そうこれがのちの伝説とし語られる甲斐の獅子の伝説の始まりであった。

序章（後書き）

まずは、すみません。何分始めて書いたもので、でも、これからいろいろがんばっていこうとおもつのでよろしくお願いします あと、感想もできたいお願いします。

次回は武田といえあの2人ができます。それでは次回はいつになるかわかりませんが

がんばって書こうと思っております。では、さらばです。

第1章（前書き）

どうもーマサムネでーす 前回の告でいった二人の子供バージョ
ンを出そうと思います。 また、一人無双武将を出そうと思います。
ただ、この方を出すといろいろ無視しているのでもし、それがダメ
な人はもどってください。 それでもいい人はどうぞ、ご覧ください
話は一気に8年後の話になります。

第1章

やあ 俺の名は武田刹那 なぜか分からないが、あの武田信玄の息子としてこの戦国時代に生まれた。

ただ、この戦国が普通の戦国ではなく、あの「戦国無双」の世界だとは正直驚いた。

確かにこの世界に来る前に戦国無双のゲームやっていたがそう最中にいきなり、意識を失い

そして、気がついたら、赤ん坊でこの世界にいた。

ただ、おかしなことにこの武田家の息子は俺だけで、事実上の次期後継者になった。

また、信玄の父、信虎は急死して、自動的に父上が武田をついでいた。

また、この時代では、今川とは同盟はしていなかった。

また、俺が一番驚いたのは自分の体だった。まず、最初に、3ヵ月で喋れるようになり、二足歩行もできるようになっていた。

その2年後には文字の読み書きをマスターした。それが巷に広まり、甲斐の麒麟児などといわれたのは記憶に新しいことだ。そんなことがあって8年の月日がたった。

刹那「ん・・・んん・・・」

襖の隙間から入った朝日の光で目覚めようとしたが、腕に誰かに押さえられて身動き取れなかった。

押さえつけている方を見ると可愛らしい女の子がいた。その子の外見は頭はポニーテールであり

顔と体はまだ、幼さがあるが、それでも、綺麗なほうである。

刹「鈴音「スズネ」おきろ」と優しく声をかけた。

この人物は戦国無双では真田幸村の女忍「くのいち」である。

なぜ、そんな子がいるのかと、この世界でのくのいちは真田の忍では無く、武田の忍の者であったからであり。また、俺の護衛として俺が6歳でくのいちは3歳の時に出会った。

最初は主君の息子だと、おずおずしていたが、だんだんとなつかれて、いっしょに遊んだりもしていた。そんなところを父上と母上は優しいいめで見ていた。また、その時にお互いに自己紹介してそこで、くのいちの本名の「鈴音」とした。

そんな説明をしている間に鈴音がおきた。

鈴音「ふあああ あっセツナさまーおはようございます」

刹「はい、おはようございます」

といって鈴音の頭を優しく撫でた。

鈴「ふにやややや／＼／＼／＼／」

といいながら頬を赤らめてネコのよになつてきた。

刹「おつよしよし、つとけない鈴音なごりおしのですが、そろそろ起きないと幸村「ユキムラ」と甲斐「カイ」ちゃんにおこらてしますよ」

鈴「はっ！そうでしたね「本当はもつとしてほしかったんだけどね」／＼／＼／」

そんな残念そうな顔、俺は見過ごすことなくすかさず耳元で

刹「また、あとで、いつばいなでなでしてあげますよ」とフェロモンボイスを囁いた。

ボンー！と音がして、鈴音の顔が真っ赤になり頭から湯気がでていた。

俺はその後、服を着替え放心状態の鈴音を元に戻していしっしょに屋敷の門に向かって行った。

そして、門についた時に二人の少年少女がいた。

「兄上おようございます。」

「？？？刹那さまおようございます／＼／＼／」

刹「やあーおはよう幸村に甲斐ちゃん」

まず、上からご存知「真田幸村」くんです。なぜ、幸村が俺を兄と呼ぶとまず、真田家には、真田信之「サナダノブユキ」とゆ兄がいるはずだが、この世界では何と幸村しか生まれていなかったのである

そして、武田・真田家との宴会のときに知り合いそこから、遊んだり、鍛錬などをしたりして自然と俺のことを兄上と呼ぶようになった。なぜ、歳も近いどうしなのに俺を兄と呼ぶのかと聞いて見たら幸「なぜか、兄上と私は歳がつがいそうだなにより、やさしくつかっこいいからです！」

などつと笑顔でいわれると恥かしくまた、驚いていた。たしかに、俺はここにくる前は立派な社会人だったしまさか感ずかれたのかと内昌之心あせていたが、うれかったので俺は了承した。それを書いた父上と幸村の父真田昌幸「サナダマサユキ」が今夜は武田・真田両家の兄弟誕生じゃー！と昌幸さんはいつて父上が、がっはははははいつや今日はまつことにめでたいのうといい酒を豪快に飲

んでいたそのあと両家の母上たちによって地獄のようなお話をされた。

ともあれこうして俺らは義兄弟となりまた、親友ともなれたのである

る。

甲「刹那さまごめなさいね、こん朝早くから」

刹「大丈夫だよ、なてたつて、俺の大切な弟と女の子をわたせてしまったもうしわけないじゃないか〔笑顔〕」

甲「！？／＼／＼大切な人とそんな／＼／＼／＼」といって手を顔につけ腰を振っていた

次に甲斐姫ちゃんのことについて説明しよう。まず、なんで甲斐姫がこの国いる理由は何と好都合的なことで甲斐姫の父成田氏長がなんと、うちの家臣であつたためである。まあーそれだけであるえわけではなかったがある時に俺がプラーっと街にでたら甲斐姫がイジメられているところを俺が助けてそこから一目惚れなことになつてたまにいつしよに街に出たりもしてまた、彼女がいじめに会いそうなときは

俺がそいつらをぶつ飛ばしていたそれからなのかとおもつが甲斐姫も鍛錬に参加するようになった。

そこで幸村と鈴音としりあつたのである。ゲームをやつた身なので最初は鈴音と甲斐ちゃんとは中が悪かつたがまさか今でもとおもっていたがそんなこともなくお互い仲良くやつていた。

つなみに甲斐ちゃんと呼び始めたの最初に助けた時である。

さて、2人の説明も終わったのでそろそろ甲斐ちゃんをもどしますか

刹「おーいー甲斐ちゃんもどつてーこーいー」

甲「はあ！ はっははははあいセツナチャマ！／＼／＼」

おっ 噛んだなカワイイ

幸「それより兄上これか道場に鍛錬をしにいきましょう」

刹「おつとそうだった、あまり父上たち待たされるといけないな

よし！みんないぞ！」

全「はい」「はい」「はいなー」

そうして俺たちは父上が待つ武田道場に向かった。

第1章（後書き）

どーもです。いやー小説ってむずかしいですね。でもがんばりますので感想お願いします。あと次回はいつなるかわりませんがいよいよセツナくんの初戦闘を頑張って書こうとおものでそれではまた

！

第2章（前書き）

ども、マサムネです。今回は刹那くんがある無双武将と初戦闘をします。

初めて書くので、至らないところがあるかも知れませんが、どうぞ！

第2章

俺たち4人は、今、父上が待つ道場を目指しているが少し歩き難い、なぜかとゆくと、

「
」

「／／／／」

まず、上から、上機嫌な鈴音、下は、恥ずかしいそうだがどこかうれしそうな甲斐ちゃん、俺の腕にしがみついていたかれである。

それを後ろで苦笑いしながら見ている幸村がいる。

鈴「やっぱり、セツナさまの体って暖かいねー」

甲「そうね、この体の温もりは最高ね／／／／」

刹「よくわからんが、それで、お前たちが幸せであるのなら俺も幸せだ」

などと言ったら2人は顔を真っ赤にしながら俺にじゃれてきた。

そんなことがありながら俺たちの目的地の躑躅ヶ崎館へつつじがさきやかた」についた。

その敷地内にあるひときはデカイ寺が武田道場である。

その中にみんなで入ると。

信「おっ！刹那 それにみなもようきた」

全「父上「お館様」x3」

中に父上が仮面をつけていた待っていた。

なぜ、仮面をつけているのかとゆうと鍛錬や戦の時は自分を引き締め為やかっこいいからだと前にいつてたのである。

信「それにしても、刹那は相変わらずモテモテじゃなーコレで武田も安泰じゃー」

などと茶化してきて、言ってる意味が分かっているの鈴音甲斐ちゃんは今赤になって、頭か湯気が出た。

刹那「父上あまり二人で遊ばないでください」

信「イヤーすまんのう、なーに息子がワシ見たいにカッコよくて、将来美女になる者とイチヤイチヤしててついな」

などといっていると道場の入口から人が入ってきた。

???「おや？信玄公にぼっちゃんにじょちゃんたちじゃなーかー」

幸「あつ左近さん！」

幸村が今入ってきた人物の名を言ったそうこの方は「島左近」最初は武田信玄のところで、軍略を学びそして、石田三成の家臣となりあの家康に関が原で「三成にすぎたるもの」と言わせて名武将だ。

なぜ、今の時点でいるのかとゆうと父上に軍略を学びにきたのはたしかであと俺の噂を聞いて此処に来た。そして、俺を見て「あんたは、信玄公を超えられる人だ」と言われてそのまま俺の配下になった。つなみに、今の左近さんの歳は14歳で俺たちの兄貴分であり、

左近さんも俺と幸村はぼつちゃんと呼んで、鈴音と甲斐ちゃんはいじよちゃんと呼んだ「今の俺たちの歳は刹・8歳。幸・7歳。鈴・5歳。甲・6歳となっている」

刹「左近さん、どしたんですか、メジらしいじゃないですか、自分の「エモ」を持ってきて？」

そうだ、なぜ、今、左近さんは自分の武器「斬轟一閃刀」を持ってきていた。

左「なにっで、信玄公まだ、話してなかったんですか？」

信「おっ！そうじゃった。刹那よお主も自分の武器は持ってきてるな？」

刹「はい、父上ここに」と俺は後ろの腰に納めてた剣を見せたその剣は左近さんが使う斬馬剣タイプで、また、デザインは「三国無双」でいたキャラ「関平」の第三武器の飛龍裂空刀とそのものだった。

ただ、ちがうのは鞘の部分が龍ではなく獅子であることと剣の部分が金色に輝いているところからこの武器の名前は「獅子輝剣」「ししこうけん」となずけた。

信「よし、これより、おぬしはこの左近と真剣の一本勝負をしてもらう」

刹「はっ！父上コレが「最終試練」のお題ですか？」

信「ほおう、すでにきずいてか」

刹「最初に入ってきた左近さんの雰囲気は戦にでる気でそれに左近さんが武器をもったとゆうことはとても特別なことなだと考えたか

らですよ」

そうこの生まれた時から俺たち4人は武田の試練を受けていてちょうど3人はもう試練は終わったが、俺だけまだったのだ、

左「あはははは、信玄公これは一本とられましたな、それじゃそろそろやりますか」

刹「はい、わかりました。みな下がっていてくれ」

幸「兄上がんばってください！」

鈴「セツナさまガンバです」

甲「刹那さまぜつつつたい勝ってください！」

3人に応援され俺は左近さんと向かいあう左近も自分のエモノを構えて俺も構えた。

信「それでは、始め！！」

父上の合図と、ともにまず、俺がいつきに踏み込んでいき左近さんの頭上から振り下ろしてそれを左近さんが受け止めたその瞬間強い衝撃波が出た、そのままツバ競り合いになってお互いいっぽも引かず引き分けとなりお互い少し離れてそのままこんどは激しい打ち合いになった道場に響く鋼と鋼がぶつかりあう音、俺は時に攻めたり、時に守ったりしながら打ち合いをした。そして、左近さんのこん身の一太刀を防御して吹っ飛ばされた。そこで、俺は剣を逆手に持って後ろに構えた。

左「ほう、おもしろい、かもえですね」

刹「ええ、これが、本来の俺の戦い方です。これからは全力でいき

ます！」

その瞬間、俺は本気になったとたん体から「気」があふれでてきた。

左「！！」「すげ、こんな小さな子がだすものじゃないぜあの「気」はこっちも本気でいかないとな！」

と左近さんも本気になりお互いこん身の一撃で勝負を決めようとしていた。

そして、刹那が一瞬で消えその消えた途端に左近さんが一気に剣を振りおろしてその瞬間に道場内が強い光に包まれて辺りが何もみえなくなつた。

信「おっ！コレは！」

幸「何も見えない！」

鈴「眩しい！！」

甲「何が起きたんだい！？」

そう、みながゆつた、そして、光が無くなりあたりが見えるようなると2人立っていたが左近は自分の武器が床に刺さつてた。対す刹那は少し服を切られたがそれ以外はなんとも無く威風堂々とたっていた。

信「それまで！この勝負刹那の勝ちじゃ！」

左「イヤーまいりました。ぼっちゃんはたいしたお人だ」

刹那「イヤこちら一重でした。ありがとうございました。」

信「刹那よ、おもでとうこれでおことも武田試練は合格じゃこれからも励むのじゃぞ」

刹「はい！父上」

幸「兄上！おもでとうござい・・・兄上！？額か血が！」

鈴「ええええ！？はっは早くてあておしないと」

刹「大丈夫だよ、こんなものすぐに止まるさ」

甲「大丈夫じゃないですよ！？そんなことで病気に何たらどうするですか！さあ早く手当てしましょ！」

刹「わっわかったからそんなに早くひっぱんないでー」

そのあと俺は二人に心配させてしまったのでそのおあびとして2人とデートをすることになったとさ。

第2章（後書き）

イヤー小説こんなに難しいけどこんなに面白いものとは知りませんでしたよ、さて初戦闘はどうだったでしょうか何部初めてだったの
でコレから頑張っていこうと思います。次回はまたもや時間は飛び
ます。たぶん今度は刹那くんたちの初合戦を書きたいとおもって
います。まだいつできるかわかりませんが、なるべく早く書こうと思
っています。それではまたまた。

第3章（前書き）

おひさです。マサムネです。今回は前回の話から進んで刹那くんたちが子供時代から、青年時代になって、そして、初合戦の話です。あと合戦ナでけどオリジナルな合戦でかつ初めて書いたのでできらでけメインたちを活躍させますのまた、前半・後半と分けて書きます。では、どうぞ！

第3章

あの、最終試練から時は流れ俺たちは子供から青年えと変わっていた。

その時から甲斐では嵐の予感が渦まいてた。

このころ甲斐はまだ統一されず今は武田家対武田によって倒された家が結集した反武田連合の2分されていて

だが、いま膠着状態だったが父上がついに甲斐統一に動いた。これが俺たちの初陣となった。

ここは武田・反武田の絶対境界線であり反武田は「高遠城」を防衛拠点としあちかもこれを決着にするのか戦力を集結してた。

対す武田は「躑躅ヶ崎館」から出陣して境界線のところに布陣した。

『武田本陣』

今、俺は幸村と対峙している。ちなみに、幸村の様態は「戦国無双3」の格好と同じである。ただ武器が「戦国無双2」であつた「紅牙飛燕」を使っている。

対す俺は格好は下に黒いシャツで上に半袖の赤いジャケットを着てその背中には金色で刺繍された。獅子の絵があり、また、ズボンには黒で長いヤツで横に金色のラインがあり、腕には金色の籠手をしている。そして白のハンドグローブ「指先なし」のヤツを手につけてまた、コレにも金色の獅子の顔が両方に描いてあつた。そして、武

器は『獅子光剣』ではなく、している人は分かんと思うが「侍戦隊シンケンジャー」でシンケンジャーたちがメインで使ってた武器「シンケン丸」を少し長刀に近いかつ、刃がシルバーじゃなく、金色となってる。この剣の名前は「シシ丸」となずけた。「シシ丸」の能力については、またあとで語ろう。

ともあれ、俺たちはお互いの武器を構え合ったいた。

刹「……………」

幸「……………」

最初に動いたのは幸村だった。

幸『ハッ！』

幸村の鋭い突きが俺に向かう、それを俺は最小限の動きで払いのけ逆にそのまま俺も突き返した。

幸「クッ！」

すかさず幸村は後ろにジャンプし後ろに飛び着地したら、すかさず間合いをつめて右上から振り下ろした。それを俺は。

刹「あまい！」と言いながら止めた。そして、それを払いのけた。

幸「まだまだ！ はあいはあいはあいはあいはあい！！」と今度は目にも止まらない速さの突きを繰り返した。

俺は、それを巧みに避けて幸村の一瞬を突き、電光石火のごとく「シシ丸」で「紅牙飛燕」を吹っ飛ばした。

幸「あっ！？ くっ」と「シシ丸を幸村の首に剣の先をつけた。

刹「勝負あつたかな？」

幸「はい、負けました。やっぱり兄上はお強いですね」

刹「まあな　しかし、幸村もなかなか槍に強みと鋭さそれに、魂が感じてきたよ」

幸「ありがとうございます。しかし、兄上はすごいです。私はすごく動いていたのに兄上は今の位置からそれほど動いていないじゃないですか」

と幸村は俺のすごさに目をキラキラさせていた。そのとりなのだ。さっきの試合で俺は突きをしたいがいではいまの位置を動いていなかったのだ。

そんなことを話していたら誰か来る気配を感じ後ろも見ないで。

刹「鈴音帰って来たか」

鈴「はい　もう刹那さま私が気づかないように気配を消して後ろから抱き着いて驚かそうとおまつたのに」と後ろを見ると後ろに鈴音がいた。様態は「戦国無双3」くのいちの格好と同じでただ違うところがあつて、それはゲームだと胸がBカップだったがここではCカップで無双武将「ねね」くらいあるのだ。そんなこと説明していると鈴音が不満そうにホッペをふくらましてた。

刹「ごめんな、鈴音、おまびに私が抱きしめてあげましょう」といって腕を開いた。

鈴「わぁーい　刹那さま／＼／＼／＼」と言って俺に抱きついた俺

は優しく抱きしめた。

鈴「やっぱり、刹那さまはあったかいですー／／／／／」

刹「そうか、それは、よかったです。それで鈴音、首尾はどうでした。」

鈴「あっ はい、敵の戦力、陣容、敵武将・兵糧庫、あと、城への隠し道を見つけました」

刹「そうか、でかしたぞ！「ナデナデ」」

鈴「えへへへ／／／／／もつと撫でてください／／／」

鈴音には敵の偵察と城への隠し道を探してもらった。そして、俺が鈴音を撫でていると

甲「アアー！ー！？ ずるいー！ー！！刹那様あたしにもしてくださいよ／／／」

と言いながら後ろから抱きつく甲斐ちゃん、今の格好は「戦国無双3」と同じである。

しかし、この二人はよく抱きつきそして、胸もなすりつけるようにしてくる。

俺だって2人の好意はきずいてる。どこぞ、鈍感天然女タラシの主人公ではない だが、やはり、これは、恥ずかしいが、俺は、人前るときではそういった恥ずかしい仕草を顔に出さないようにしている。

刹「すまない。そういえば、甲斐ちゃんが来たという事は軍議かい？」

甲「あつはいお館様が軍議があるから読んできてくれと頼まれました」

と俺から降りて軍議があるとつたえた。

刹「ありがとう甲斐ちゃん」あとでこのつめ合わせわするから」

甲「！？／／／／はい／／／」

甲斐ちゃんお礼をゆうため鈴音を離してお礼を言って耳もとでつめ合わせのこと囁いた。

そして、みなで、本陣に向かった。

刹「父上ただいま、まいりました」

信「おおー来たか刹那それにみなも」

本陣に入ると中央に大きい長い木のテーブルがありそこにはこの戦の地形が描かれてる地図がある

そしてテーブルの先頭に父上がいて、父上から見て右側に昌幸さん、左近さんがいた。

そして、俺たちは父上から見て左側に横一列に座った。

信「さて、みなそろったことだし、これより軍議をおこなう。まず、敵の様子はどうか？」

鈴「はい、敵は城に籠らず城の外で主力が陣を張っており、陣容は無形で主な敵武将はあまり目ばしい人物はいません。おもに重要な武将は総大将の諏訪頼隆「すわよりたか」ぐらいです。あと兵の数

はこちらの倍の1万でしかし、団結力は我が軍より劣っています。兵糧庫は城の中になりました。」

信「うむ、ごくろつであつた。鈴音」

鈴「ハア　ありがとうございます。」

信「さて、ここまでは、刹那の読みどおりじゃな」

刹「はい、今頃、別働隊が上田城を目指してるところでしょう。」

俺はまず、忍による情報活動を強化した。戦で一番力になるのは数では無く情報が戦を制するのであり

また、この戦のために反武田に偽の武田軍の大軍勢せまるとゆう情報を流しまんまあと引つかかり敵軍は、はまり自国の持てる戦力を終結させて他の城は手薄になり別働隊が手薄な上田城を取るそうゆう策である、また、この策を成功させるために父上と俺と主力の武將がいるとなれば敵はこれほどのエサにくいつかないはずがないと思ひ自らをおとりとした。

左「さすがは若ですな大胆不敵でかつこの一戦で甲斐統一を果たそうとしてるですから」

と左近さんがいったちなみにこういった軍関係のことになると左近さんは俺のことを「若」と呼んでいる。

刹「そりやそうですよ、こんなことで足止めされてたら先に進めませんからね」

そしたら左近さんが「ハアハハハそりやそうだ」笑ってこたえた。

刹「とりあえず俺たち主力が正面で敵できるだけ城かろうざけつ

て、そして信幸さんの隊が鈴音が見つけた隠し道を使って城に奇襲して、城を取りそのまま後ろから敵を突くそのため、こちらの陣形は最初は鶴翼の陣で防御して城が落ちたら、陣を魚鱗の陣で攻めるで、よろしでしょうか」とみなに聞いてみなは無言で頷いてくれた。父上が、

信「うむ、あいわかった。みなにあらためてゆうがこの一戦で甲斐統一を果たすみなこころしてかかるじゃぞ！」

全「ハッ！！」「」

信「それから、刹那・幸村・鈴音・甲斐姫よ、おことはこれが初陣じゃ、じゃが無理はするなここで死に急ぐことわゆるさんかならずい帰って来いよいな」

刹・幸・鈴・甲「はい！父上（お館様）×3」

信「では、これにて軍議を終わる。みな準備にかかれ！」

全「ハッ！！ハッ！！ハッ！！」

こうして俺たちの初陣が始まり、また、この戦いは「高遠城の戦い」と呼ばれ俺に「甲斐の獅子」と呼ばれることになるた戦いになった。
・・・後半へ

第3章（後書き）

イヤー　くのいちと甲斐姫ってカワイイですね。次回ですが後半で初合戦を書きます。あと鈴音（くのいち）の様態をかえました。がもし、これを見て「こんなのくのいちじゃねー」って思ってしまったら申し訳ありません。また、次の話で文字力を出そうと思っています。

ちなみに、初めて出た陣形の効果は「戦国無双2Empires」と同じ効果が出るようになっております。最後に今、学校が忙しいのでこの小説の更新が遅くなるかもしれませんが、なるべく早く後半を書けるよう頑張ります。では、また、さらばです。

第3章 後編（前書き）

おひさです。マサムネです。やっと学校の実習がひと段落しました。今回はいよいよ初合戦うまく書けるようがんばります。戦場は本編で書きます。では、どうぞ！

第3章 後編

軍儀が終わり、俺たちは、自分たちの部隊に向った。俺たちの軍の戦力は7000で出陣したのち2000が別働隊で上田を目指して今は5000になっている。敵は、その倍の10000となっている。

だが、団結力がない軍など恐れにあらずである。

そして、俺たちの部隊が待つところに着いた。

俺たちの部隊構成はまず、全体での兵力が1000で司令官が俺で幸村・鈴音・甲斐姫は副将である。

まず、配置だが、本隊の俺中心にまず、右に幸村の槍隊が、200人 左に甲斐姫の歩兵隊これも200人

そして、後ろに鈴音の弓矢隊が100人ちなみにこの弓矢隊の100人の内30人が忍で鈴音の部下であり
状況によって、偵察・工作・伝令などをさせることもできる。

そして、部隊の皆に集まるよう指示し俺を中心のに左に幸村、右に甲斐姫・鈴音と並んでいた。

俺は部隊の皆に号令を掛けた。

刹「みなのも、これより我が軍は反武田勢との決戦であり、また、我が隊の初陣である。 だが、敵は団結力も無い言わば「カス」であるり、しかも、数に任せて攻めてく烏合の集団である。

だから、この戦で力に任せた戦術が以下に脆いかを刻みこみ、我が隊の勝利を飾ろうではないか!!」

部「「「「「「「「オオ!!」」」」」」」」

刹「そして、もう一つ皆に約束してほしいことがある、それは誰一人欠けることなく生きてともに

勝利の酒を飲もうではないか————!!」

全「「「「「「「「オオ——!!」」」」」」」」

刹「では、みなのもの、準備にかかれ!!」と号令をかけ皆は準備にかかった。

幸「おみごとでした。兄上」と声を掛けてきた幸村

刹「ありがとう、さて、俺たちも準備にかかる　まず、今回の戦は昌幸さんの隊が城を迅速に落とせるかどうかで、戦がきまる」

つなみに、戦場は広い草原が広がりそして、城は小さい山の上にある。

そして、我が軍の準備も完了し本陣から出陣した。

敵は情報どおり無形陣であった。俺たちは策どおり、鶴翼の陣を形成した。

刹「よいか。別働隊が城を落とし背後から、敵を突くそれまで、敵の目をこちらに向ける！」

幸村「甲斐姫!」「戦や政の時はちゃんずけしないのである。」

幸・甲「ハッ！」

刹「お前たちは、鈴音の弓矢隊の一斉射後に敵の先方を叩け！鈴音も頼むぞ！」

幸・甲・鈴「ハッ！！」

部「敵、きました！」

刹「よし、いくぞ、敵に俺たちの力を見せ付けるぞ！」

全「オオオオオオッ——！！！！」

鈴「弓矢隊のみなさんーいまから弓矢の一斉射をかけます。目標は敵前線！構え！打て——！」

鈴音の号令を合図に多くの矢が放たれ、敵の鼻先をかすめた。

幸「よし、敵は勢いをなくした。これより、敵に攻撃を掛ける。敵の目をこちらに向けるぞ！」

甲「あたいたちも、いくよ！着いてきなさい！」

幸村と甲斐姫の部隊が敵に向かいそして、両軍が激突し、そのまま乱戦となった。

幸「我こそ、武田刹那の家臣 真田幸村！恐れを知らぬものはかかって来い！」

甲「同じく、甲斐姫！女だからってあまく見るといたいいめにあるよ

！」

といい敵に突っ込んでいった。

幸「ハッ！」

幸村の槍が敵を一人、二人と切り裂く

敵「なにをしている！？ 囲んで追い込め！」

敵は幸村を囲むだが、

幸「燃えよ我が魂の炎よ！！」と言ったら槍の刃の方に「炎」と文字が宿り炎が刃からでて、敵はおどろいていた。それを見逃さない幸村は

幸「セイヤーーーーーー！！！」

槍を囲んでる敵に振りかざし吹っ飛ばした。不思議なことに炎は敵を焼き尽くしたが近くの味方や草などに火が点くことは無かった。

甲「ハアーーーー」甲斐姫も自分が愛用する鞭剣「水竜之薄金拵」「すいりゆうのうすかねこしらえ」を鞭に使い敵を薙ぎ払ってた。

甲「これで、頭を冷やしなさい！！」と敵に苦戦する味方に向って剣に「水」と文字が宿り地面に突き刺すと周囲から水柱が出て敵を吹き飛ばした。また、これも不思議なこと味方には被害は無かった。

刹「幸村と甲斐ちゃんの「文字力」上達したな」と関心していた。

知っている人は知ってるだろう、文字力とは『侍戦隊シンケンジャー』であった。シンケンジャーの源いえる力である。なぜ幸村たちが使えるのかは、もともとこの世界の人間の中に文字力があったの

だが、それを引き出すことは難しいとされていたが俺にもここに来た時に文字力をもっておりその力を十分に発揮できたのである。また、幸村たちができた理由としたは、俺が教えたと簡単に言っておこう。

さて、戦況は策道理進み敵の先方は潰され敵の目をこちらに向けることができた。

そして、城を見て見ると煙が上がっていた。と鈴音が来て

鈴「刹那様 昌幸様の部隊が城を落としこれから、背後かせめるそうです。」

刹「わかった。ならば、こちらも攻めて一気に決着をつける。鈴音、みなに伝令をだせ」

鈴「はい！わかりました」と鈴音が消えて俺は部隊の皆に号令をかけた。

刹「これより、我が軍は鶴翼の陣を止め魚鱗の陣で敵の攻めるよいか俺に続け——！」

俺は「獅子輝剣」を腰から抜き一気に敵、目掛けて突っ込んだ。敵も俺に気がついたが、急に現れた鈴音

鈴「よし、お仕事しますか、ニヤハ」と二本のクナイ「烈風円旋刃」「れっぷうえんせんじん」

「風」の文字力が宿り、ジグザグに移動しながらクナイで攻撃した。その風はかまいたちとなつて、敵を切り裂いた。

刹「吼えろ我が獅子の心よ！」と「獅」とゆう文字が剣に宿り剣が黄金色に輝いた。そして、俺は一気にジャンプし上空から獅子輝剣を振りかざした。

刹「セイヤーーーーーー！！！」

地面に剣を叩いた瞬間に今いるところから周りにいた多くの敵が一瞬で吹っ飛ばされた。

俺は休む暇も無く、敵に向った。最初に目に入った敵を斬り、その横から来た刀を刀ごと敵をぶった斬った。尚を俺は止まらず敵の攻撃を避けたり、受け流し、時には前後から来た攻撃をジャンプして避けた。相打ちさせたり、敵を斬ったり、ぶっ飛ばしたりして、敵を薙ぎ払っていた。

その後ろでは幸村・鈴音・甲斐姫・左近の部隊が攻めていた。そして、昌幸の別働隊も背後から敵を突いた。敵は退路を絶たれた俺は一気に敵本陣へと突き進んだ。

刹「敵大将と見た！」

諏「なに、ヤツだ！」

刹「某、武田軍が将、武田刹那！その首を取ってこの戦を終わらせます。」

諏「なに！？ 貴様あの信玄の小童かそう簡単に首はやらん」と槍を突いたが俺は冷静に防御して、その最に槍の刃が折れた。

諏「なに！？」

そして、俺は一気にまわいをつめて、諏訪を斬った。一瞬なにが

幸「ありがとうございます。これも、兄上のおかげです。」

刹「気にするな、たしかに教えたのは俺だが、結局はお前たちの力でモノにしたんだ。誇ってもいいことだ。」と言うと幸村は照れていた。

幸「ありがとうございます。兄上／＼／＼　そういえば、戦いの最中、敵が兄上に向ってこんなこと言っていました」

刹「うん？　なんと言ったんだ」

幸「俺たちは今「獅子」と戦っているんだ」といつてました。」

刹那「なるほど戦場で戦ってる姿と格好・武器でそう思ったんだらうなかなか面白いこと言う奴もいるんだな」

幸「そうですね。兄上」

幸村と話していたら

鈴音「セツナしゃまー／＼／＼／＼」と顔真っ赤にした。鈴音が来て俺に抱きついた。

刹「おっと、鈴音お前酔ってるな」と言う

鈴「セツナしゃまー／＼ワタシ今日一日がんばりました。だから、ナデナデしてくだしいー／＼／＼」

刹「鈴音、わかったよ今日はよく頑張ったな「ナデナデ」」

鈴「ふゃーーーーーー／／／／／」とネコ見たいに
じゃれてきた。

甲「セツナ様アタシもすつつごく頑張りました。だから／／／／／と俺の後ろから甲斐ちゃんが抱きついた。特に俺の背中に自分の胸をつけながら、

刹「ああ、甲斐ちゃんもよくがんばったよ「ナデナデ」」

甲「えへへへ／／／／／」

刹「「さて、これからどうするか」」といまの状況を考えながら夜空に浮かぶ月を見ていた。

この時、甲斐は武田によって統一された。そして、武田刹那の名も「甲斐の獅子」として広く知られるようになったのである。

第3章 後編（後書き）

どうでしたか、初合戦の話は自分では頑張ったと思います。

次回の話は刹那君に相棒となるモノが登場します。また、歴史とゲームに無かった合戦も少し入れおうと思います。また、少し学校習の関係遅くなるかも知れませんが、これからも、がんばるのでよろしくお願いします。

では、また。

第4章（前書き）

ついに帰って来たーーーーー！イヤァーやっと学校が冬休みになって、バイトも落ち着いてきて書ける時間ができました。
では、相変わらずですが第4章みてください、どうぞー！

第4章

あの戦いから、半年、俺たちは戦いで傷ついた甲斐の復興をしてた。

まず、甲斐の道路工事と関所を撤廃した。これにより、他国の商人が入りやすくなり、また、他国の情報も入りやすくなる。次に各河川に治水工事をおこった。

また、俺の指示で河川の合流地点に新しい川の道を作らせた。これにより、川の流れが真っ直ぐになり高い堤防より、安全で何より皆の疲労も費用も低くおさまるし、また、農家には安全に農業用水を送られ

農産物の増加に繋がり近隣住民の民心も掴めることになった。

次に治安も悪代官や利権に群がる商人（ブタ）は捕まえ処分し財産没収と国外追放を命じた

また、民の税も下げた。警邏に出る兵には、できらだけ、民に温厚にと徹底させた。

これらの政ごとにより甲斐はこの半年で急速な発展と民の熱い支持がなった。

さて、俺たちは今、上杉や北陸の進行に備え上野の国を攻略のため、軍備増強をおこっていたが、問題が発生した。

刹「悪魔の馬が出ただ？」

鈴「はい、そうなんです」

今、俺は部屋で政務をやりながら、鈴音の軍備の状況を聞いてた。

今、我が軍は軍馬補充のため、

「馬狩り」をしていたが、野生の馬たちを捕らえようとすると、ここからともかく、多くの馬を引き連れたそれは、大きな馬で、そして馬狩りに出た者は踏み殺されたり、瀕死の重傷を追ったりする者もいた。そして、その目で威圧された者は動けず自分が乗っていた馬も倒れて泡を吹いてしまふありさまだった。馬が無くては戦が出来ぬとこのたびその馬打つため軍を出すかと話し合いをして、その話が今、俺のところに来たとゆうわけである。

鈴「いかがいたしましたよか？」と鈴音が聞いてくる俺は、

刹「あつて見たいなー」と言った。

鈴「はい？」と鈴音はそういった、

刹「だってそんなにでかくてなおかつ強力で面白そうな馬だぜ一度見てみたい」

鈴「みつ見てみたいなんて！相手は悪魔と言われる馬なんですよ、殺されちゃいますよ！」

刹「たとえ、悪魔の馬でも俺はこの目で見てみたい。もし、俺の想像を超える馬なら俺の馬にしたい」

鈴「自分の馬にするなんて！おやめになった方がいいです！」と反対の声を出した。

刹「でも、俺には必要なんだよ 見てみる俺の図体を！」俺が立ってみると日本男子の身長を軽く超える、巨体があり、身長は軽く190cmぐらいあった。

刹「俺はでかいから、並の馬だつと一回で乗り潰してしまう。だから、その馬が入ればきつと思いのまま駆け抜けることができるだろう」と言つと鈴音も観念したようだ、

鈴「わかりました。これ持っていてください、この紙にその馬が出るところが書いてあります。」と俺にその紙を渡した。

刹「ありがとう、鈴音」

鈴「こうなると刹那さまは止まりませんからね あとで必要な物を持ってきますんで」

刹「わかった、今からそこに向う皆には10日ぐらいに帰るといってくれ」と鈴音の頭を撫でながらそう言った。

鈴「はい、わかりました／＼／＼／＼／＼」と顔を赤くしてそう言った。

そのあと、俺は軽い支度をして紙に書いていた場所に向かい途中に鈴音が必要なものを持ってきてくれてそれを受け取り、その場所での馬を待つため腰を掛け眠ながら待つことにした。そのまま夜を越した。

朝になり朝日がさすころ俺の後ろをドンと押す感覚があり、俺はそれを払ったが今度は強く押すもんだからつい「ぐっ」と言ってしまった。しかたなく、起きそちらに向けると俺は言葉を失った。

そらこには俺よデカイ馬がいて俺を上から見ている。また、その毛並みは白銀のように白く鬣は黄金のような色していて、朝日が馬に

射すと体から神秘的なヒカ리를放った。

刹「で・・・でかい　こ・・・これでも馬か！！」

刹「お前かぁー　本当に来てくれたのか！　やあーありがとう」と馬に向って頭を下げた。

普通の人から見たらただの変な人と思われるが俺はそれほどまでに嬉しかった。

俺は馬をじっくり見ることにした。

刹「なんて、素晴らしいんだ、お前は！　お前みたいなキレイで神秘的な馬は見たことが無い！」
俺はまるで女を口説くように馬に語りかけた

刹「ほれた！　心底お前にほれたぞ！！」と言い俺は「はははは」と笑うと馬がこちらに向くと
自分の体を見せるた。そこには傷だらけのからだがあった。

刹那「お前へ傷だらけだなあ　お前よっぽど戦さ好きなんだなあ！」

ホラ見ろよと言わんばかりに俺も服の上を脱いで見せた俺も鍛えぬかれた体を馬に見せて馬は顔近ずけて俺の体を嗅いだ。その鼻息がくすぐったくつい俺は笑いだしてしまった。

刹「ひゃあーくすぐったい」と馬の頭を抑えて一旦離れた。
そのあとは何もすることなく馬は草を食べてた。　俺は様子を窺っていた。

刹「怒るかな・・・イヤそんなにおこらないよな　俺は本当にお前が好きなんだ」

馬もこちらにチラと振り向く俺は笑顔で返し馬はまた、草を食べ始めた。

俺はすかさず馬に飛び乗った。馬は驚いたがすぐに目の色を変え暴れ始めた。

俺は離されまいと馬の鬣を掴んだ！

刹「おーおーやるねえ！」と余裕といていたが段々馬の暴れが激しくなり次の瞬間

刹「うぁー！ー！」馬の暴れに耐え切れず、手を離してしまい吹っ飛ばされるが空中で体制を良くして着地した。でも、馬は仲間を連れまたどこかへと消えていった。

俺はしかたなくまた、寝ることにした。

そして、次の日俺がのきに空を眺めていると急に上か白い物体が迫ってきた俺はすかさず避けて白い正体を見るとなんとあの馬であったのである。だが、昨日と違い馬は怒っていた。

刹「昨日はスマン！辛抱できなかったんだ」と馬に土下座をした。馬も落ち着いて俺の話を聞いた。

刹「なあ聞いてくれお前も図体がでかい、でかいヤツは嘘をいわないんだ 判るな！だから聞いてくれ俺は本気でお前に惚れたんだ」俺の話が終わると馬は乗れんばかりに俺を待っていた俺は嬉しくなりその馬に飛び乗った昨日と一緒に馬は暴れ始めてまた、俺は吹っ飛ばされた。そんなことが10日も続いたころ、その日だけは馬群れも連れずまた、いつも朝に来るのに今日は夜しかも夜空は雲ひとつなく星がたくさんでて月も満月であった

さすがに日がたつにつれてこの馬にも慣れてきたそしてついに馬も暴れるのやめた。

刹「さあ俺のいうときいてくれ」と馬の腹をけった

その瞬間馬は地面を思いっきりけりまさに風のごとくの速さをほこった。

また、なによりその姿は夜であるのに神秘的に満月がてらしていた。

刹「速い！そして、なんて神秘的に月がお前を照らすんだろう！

そうだお前の名は神月へしんげつ」

今日からお前は神月だ！！」俺たちは時間を忘れただひたすら走ったそして、日が昇ったところで

家に戻った最初は皆驚いていたが事情を話すと納得した。

これにより軍備増強はスムーズに進みついに上野を攻略戦が起こった。

敵は我が軍に先手打つため、あえて行軍していたがその時一人の兵士が小山の上に誰かいると指差し敵は全員そちらを向いたそこには刹那と神月がいた。敵はその二人の神秘的な光に心奪われたがすぐそのころは打ち壊された。

刹「ウオオオオオオオオオオ！」と一気に神月で駆け下りてきたのだ。そして敵の横腹をついていたその時、神月に踏み殺されたり、刹那の斬激を食らってカラダを真っ二つになる者もいた。敵は突然のことで混乱しまた刹那と神月の突撃により分断させられてしまった。それに乗じるかごとく武田軍が敵の前後と小山から敵目掛けて突撃を駆けてきた。過労で逃げ延びた兵士たちが城に戻り籠城戦にしよう門を閉めているとズドンーーーーーと門が思い切り吹っ飛ばされて敵では門の下敷きになる者もいた。一体なにごとかと

砂埃が終わるのを待っていると急に周辺に風が起き砂埃を吹っ飛ばした。

その中には刹那と神月がいてその後ろには武田の軍がいた。敵はあえなく城をあけわたした。

この戦いの情報は忍を使い広げ敵に恐怖感を与え以後次々と敵の城は無血開城をしていた。

そのため上野攻略戦は我が軍の大勝利で終わり以後上野は上杉と北陸の侵攻と防衛に使われるようになり また、刹那と神月の話は全国に広がることになった。

第4章（後書き）

どもです久々にやると何か気分がよくなります。今月は学校やらバイトで残業したりして心底疲れてしまい書く力が出ませんでした。が久しぶりに書いて何か気分が良くなりました。次のはしですが、今度は戦いはお休みで平和な話を書こうとおもいます。今年中に書ける頑張ります。

では、また、さらば！

第5章（前書き）

マサムネです。今年もあと少しですなあー 皆様はどう年を越しますか自分はのんびりとこれやって、テレビを見ながら年を越します。

では、今回の話は戦いは無しで平和な話を書きます。では、どうぞ

第5章

前回の戦いでの効果も合って周辺の国は無闇に攻めてくることもなく様子を見みといった感じで、

甲斐は今、日本でも有数な国に成長し乱世を忘れる位に平和にあった。

鳥たちがチュウチュウと鳴きながら朝の穏やかな時間を堪能しながら刹那は寝ていた。

此処の所、内政など賊の掃除など急がしく、今は死んだように寝ていた。

そんな中、襖が開いた。

甲『おはようございます刹那さま・・・ありや、まだ、寝ていましたか？』

襖を開けたのは甲斐姫であった。彼女が来たわけは愛する男ところに朝駆けに来たわけである。

肝心の本人は日ごろの疲労できずかないでスヤスヤ寝ていた。

甲「ふふ、悪戯しちゃう／＼／＼」と言って彼の上に覆いかぶさった。

甲斐姫の顔の前には今刹那の綺麗な顔があった。顔の肌は白く女の自分でも羨ましいくらいであった。

また、彼にきずかない様に体を触った。彼の体は極限に鍛え上げられていた。

彼の体を触っていた甲斐姫は

甲「エへへへへへへへ／／／／／」と彼に抱きしめられているシーンを想像していた。

そして彼女は極上とも言えるもの、彼の唇にロックオンした。

甲「ごくっ・・・こ、こここれは起こすためにすることだからね／／／／／」

そう言つて、彼女が唇に近づきそして、

甲「んっ・・・」よ、よっしゃーーーーー／／／／／

ついに愛する男とのファーストキスをしたのだがこのあと予想もしないことが起きた

ガシッ

甲「んふ？」

彼女の頭を何者かの手が掴み 動けなくなってしまいそして

甲「んむう！？むちゅ・・・ちゅる・・・くちゅ・・・ちゅ」
驚いてはなれようとしたが頭が押さえつけられ動けなかった。

甲「ちゅう・・・くちゅ・・・ちゅ・・・んぱあっ！ はあ、はあ、はあ／／／／／」

手が離れてやっと離れたが気持ちよさで腰が抜けてしまった。

刹「おはよう、お姫さま」刹那が甲斐姫の上に覆いかぶさるようになった。

甲「はあ、はあ、や、やりすぎです。刹那しゃま／／／／／」
肩で息をしながら答える甲斐姫

甲「い、いつから起きてらしたんですか／／／／／」

刹「ん？「ふふ悪戯しちゃおう」って所からだけど」

甲「結構、前のところからですね・・・」

そう、彼はもう彼女が入ってきた時点で起きていたのだ。だが、あえて彼女には寝ているように見せて観察していた。

刹「さつて、お仕置きも済んだことだし」

甲「うれしいお仕置きですね／＼／＼」

刹「そうかい？それより、起きれるかい？」

甲「ま、まだ腰が抜けてしまっておきません。／＼／＼」

そんな恥ずかしそうな甲斐姫を見て刹那は。

刹「しかたない。今日は特別だよ」

甲「え？　きゃあつ！」

刹那は甲斐姫をお姫様抱っこした

甲「こ、このまま行くんですか！／＼／」

刹「そうだよ、あんな大胆なことをしたんだ今更恥ずかしがらない、それに甲斐ちゃん可愛いところも十分に堪能したしね」

甲「／＼／つ！？もう知りません！」

ぶいと横を向いたがその顔はどこかうれしそうだった。

そのあと皆が待つ居間に行ったつなみにお姫様抱っこをしながらそこにいた鈴音に「私もしてくださいー」「とうらやましそうにね

だつてきた。父上、母上、幸村、たちは「今日も平和だなあー」と朝のひと時を満喫しながら、朝ごはんを準備をしていた。そして、朝ごはんを済ませた俺たちは父上と母上はようがあるといい出かけて幸村もその護衛でついてくことになっていた。

そして、今、俺、鈴音、甲斐ちゃんと一緒に町に買い物をしにきていた。

鈴音の今の格好はへそだしの和服を上に着て下はミニスカートを穿いていた。

甲斐ちゃんは『戦国無双3』のお市が着ている服装と同じで色は着物が黄色で帯が水色になっていた。

また、袖の部分には白いフリルが着いていた。

鈴音は俺の左腕につかまり、甲斐ちゃんは反対側の腕につかまっていた。

鈴「刹那様ワタシたち似合ってますか？」

甲斐姫も同じような眼差しをしていた。

刹「ああ、二人ともとっても似合ってるよ」と二人とも嬉しそうに顔赤くしていた。

そのあといっしょにいろいろ回っていった。その最周りが俺たちを見ていた「男ども」が俺が二人に分らないようにそいつ等にメンチを切つて黙らせていた。

そのあと買い物にも一息ついたので近くのお茶屋で休んでいた。

鈴「イヤー平和ですなー」

甲「ホントねー今が乱世とは思えないわんね」

刹「まあな、これも皆が力を合わせて頑張つて甲斐の国を大きくな

「ただホント感謝しているよ」

俺がそう言っていると二人はうれしそうに頷いた。

刹「さてとお茶もすんだことだしいきますか」

二人は「はい！」と言って今日一日を堪能した。

しかし、乱世はこの平和の時を許さずまた、新しい戦いが待っているだと俺の頭の中だ思っていたがこのみんなの笑顔と居場所を守るために戦うそう心に誓った。

第5章（後書き）

イヤーついに2010年もあとすこしですな、いかがでしょうかはじめて書いたのですが自分は前々からこいつたものを書きたったので今年最後に書いて満足です。次回はやっと有名な戦いを書こうとおもいます。

では、皆様よいお年を！！

第6章 前編（前書き）

大変遅くなってすみませんでした。今回の話は武田にとってとても有名な戦いですうまく書けるか分かりませんが、がんばります。では、どうぞ

第6章 前編

刹那たちが一時の安らぎに浸っていた矢先それを壊すことが起きた。

越後の龍動く

越後の上杉が武田の領に進行してきたのである

父上は迅速に兵を動かし上杉軍の迎撃に向った。

後に語られる「川中島の戦い」である。

鈴「あゝあ折角、刹那様と出かける約束がダメになっちゃった（涙）

」

幸「おいおい、そんなこといつてる場合か（汗）」

甲「仕方ないですよ幸村様、「あたしだって本当は刹那様と一緒に
／＼／＼」

左「これから、戦て時にまして相手はあの軍神・上杉謙信公だつて
のに相変わらずですな、若」

刹「ええ、でも、逆にこれなら心配することも減りますよ」

ただいま、武田軍は上杉軍迎撃のため行軍しており俺たちは馬に乗りながら他愛も無い話をしていた。

左「しかし、謙信公はすごいな、最近の情報ではもううちを待ち受けるため陣をしいているとか」

幸「まったくです、しかし、なぜ謙信公は攻めたと言え我が武田の支城を落としただけでそれ以上攻めず、陣を引いて我が軍を待ち構えているのでしょうか？」

刹「幸村その答えはとっても簡単だ」

幸「え？」

刹「単純にあの人は父上との戦を楽しみたいだけなのだよ要するに「戦バカ」なんだよあの人は」

幸「い、戦バカってあ、兄上それは言いすぎではないでしょうか（汗）」

左「まあ、その戦バカの人に挑むですからね、くろっしますよ」

刹「ああ、しかも、敵には綾御前（あやごぜん）」と直江兼続（なおえかねつぐ）」がいるからな」

左「たしか、綾御前は謙信公の実姉であり、また彼女も上杉を治めている一人であり、上杉の女神とか言われており、上杉の団結力の一つになっている存在とか、しかし、直江兼続とは私でもしりません。

若は何か知ってるんですか」

刹「ああ、直江兼続、歳は幸村より少し上だな、もともと兼続は村のでだが、小さい時に謙信公に才を見出されて謙信公自慢の軍略と

武を学びまた、綾御前からは国を治める心構えと義と愛の戦を教えてもらい今じゃあ若くして上杉の家老を勤めている程の人物だな」

左「ほう、それほどの人物とは驚きですが、若はいつそんな情報を手に入れたんですか？」

刹「まあ、鈴音に調べてもらったですよ」

実際この話にはもう一つあり刹那自身が上杉に行き調べて行きそこで、上杉の三人と偶然にも会ってしまいなぜか、気に入られてしまい、謙信からはなぜかようなバトルマニア的な眼差しをうけ兼続にも慕われるようになり綾御前からなぜか熱い視線と謙信以上に溺愛されてしまった。

だが、もしこの話が皆に知れられ怒られるのは確かなのだが一番なぜこの話をいえない理由は
我が愛する女性人たちが綾御前の話が出ると自分が危ないからである。

なぜかと言うと綾御前と少し危ないことがあったのである。
この話はまた詳しく話そうと思う。

刹「そういえば鈴音俺が頼んどいたことしてもらったか？」

鈴「はい、ご命令どおり戦場の情報と工作は上杉が来る前に済んでいるで気づかれています」

刹「そうか、苦労かけるがいつもありがとうな鈴音」

鈴「いえいえい／＼／＼／＼これも刹那さまのためですから／＼／＼」

そう言う鈴音は頬を赤らめたそれがカワイらしく見え今すぐ頭をナ

デナデしたいが今馬の上なのでここは堪えようその様子を羨ましい
そうに見ている甲斐ちゃんが

甲「そういえば後ろに運でる物ってなんなですか刹那様？」

刹「ああ、あれはまだ内緒な物でねまだ教えらないが、この戦の鍵
になる物だと言っておくよ」

甲「この戦で使う物ですか？」

刹「そう、だから、戦が始まるまで秘密何だすまない」

幸「私たちにも秘密ですか？」

刹「そうだ、幸村」

今我が軍の後ろから輸送隊の積荷の中にこの戦で鍵となる物は俺と
父上ぐらいしかしらいのである。

鈴「だいじゅーぶですよ今回もどーんと私に任してくださいー」
「ギ
ュー」

といつの間にか神月に乗り俺の後ろに抱きついてる鈴音がそう言
った。

甲「あー！ー！っ！？ちょっと鈴音ずるいわよ！？」

と甲斐ちゃんがそういつて言っすかさず俺に寄ってきて鈴音と言
い争いになった。俺はそれを黙って聞いているしかなかった。

左「いつか若後ろから切られる時があるじゃないか？」と幸村の方
を見る左近

幸「はい、それが私にも心配です（苦笑い）」
そんなことがありながら武田軍は川中島に着き陣を敷いてすぐさま
軍儀開いた

信「さて、いい加減、謙信と決着をつけんとなさて、敵はどうかね」

左「はい、敵は妻女山に陣を張っております。」「今回の川中島は
1と3を半分にし一つにした場所である」

左「今回の策に関しては勘助（かんすけ）殿から話があります。」
左近の隣に老将がいたその左目は赤い眼帯をしていたこの方は武田
の軍師の山本勘助（やまもと かんすけ）である

勘「はい、今回の戦、敵を山から引きずり出さなければいけません。
そこでまず、海津城より別動隊を編成し敵の横突きそして八幡原に
誘きだし、そして、本隊で叩くこれぞ啄木鳥の戦法でございます
いかがでしょうかお館様」

信「よし、その手で行こうでは別働隊は刹那・幸村・鈴音とす皆準
備をせい！解散！」

と父上が言つとみな準備に入った。

甲「お館様！ なんであしは刹那様と一緒にじゃないですか――！
？」と怒涛の勢いで父上に問いただす甲斐ちゃん

信「まあまあお付けそれに関しては刹那の考えなのじゃ」

甲「えっ刹那様のですか？」

刹「ああ、このことは甲斐ちゃんと左近さんに任せたいだ」

左「俺もですかい、若？」

刹「ああ、いいかいこれはこの戦を左右することだから、良く聞い
てく」

このあと話を聞いた二人は最初は驚いたが直ぐに理解し準備にか
かった。

そのあと自分たちも準備にかかった。

ここから、俺たちの本当の戦いが今静かに始まらんとしていた。
秋の風がただ嵐のしずけのようにただ川中島に吹いていた。

第6章 前編（後書き）

はい、お久しぶりです。そういえばそろそろ、戦国無双3と猛将伝が出ますね、自分は戦国無双3zを買うよていです。自分は感激です。

ついに、ps3で戦国ができるのがです「涙」

次回は川中島の戦い後編です。

いつも遅し作品ですかどうぞこれからもよろしくお願いします。
では、さらばです！

第6章 中編（前書き）

おしさです。今回は戦闘呼べる戦闘はありません。
しさびさの投稿なので会いかわらずの駄文ですが
本篇をどうぞ

第6章 中編

ついに始まった。歴史に名高い川中島合戦、今俺たちは一気に山頂を目指していた。

上杉兵「て、敵がきた、ザシュ「ギャッ！」ザシュ「グワァ！」ザシュ「ドワァ！」な、なんだ、どうし、グハァ！」敵が我が隊に気がついた時に黒い影が一瞬の内に敵を葬った。

鈴「シュタツ！刹那さまの邪魔はさせないよ」影の正体は鈴音だった。後ろから来る部隊が敵に気取られないように先に敵を殲滅していた。

鈴「さて、そろそろ刹那さまの隊が来るころだけど」そう考えていると後ろから部隊が見え、鈴音は当たりそうになる寸前にジャンプして先頭にいた刹那の愛馬・神月の後ろに背中合わせの状態に乗った。

刹「ご苦労さんで敵はどうだ」

鈴「はい、この先の我が軍の進路にいた、敵は本陣付近以外は全て討ちました。」

刹「よし、これ以上の敵撃破はもういいだろう、これより我が隊は一気に山頂を目指す！」

俺がそう言つと速度を上げたその隣いた、幸村が

幸「ここまでは手筈どおりですね兄上」

刹「ああ、そうだな、幸村俺はこの戦いが一つの転換期だと俺は思
んだ。」

幸「転換期ですか？」

刹「この戦い勝つにせよ負けるにせよこれからの関東に大きく影響
が訪れるだろう」

幸「そうですね、しかし、勝つのは武田と私は思います！」

鈴「あたしも、もち、幸村さまと同じ考えです」

刹「そうだ、この戦に勝ち一刻も早く関東を沈めるぞ」

幸・鈴「はっ！「はい！」」

武田兵「刹那さまもうすぐ敵本陣に着きます！」

刹「よし！全員このまの本陣に突っ込むぞ！」

そして、敵本陣に突っ込んだ俺たちが見た物は……………

敵兵が一人以内ただの無人の敵本陣であつた。

幸「これは、兄上やはり」と俺に聞いてく幸村。

やはり、敵は啄木鳥戦法を見破っていたかさすがは、謙信公だが、
これだけ啄木鳥の口ばしは折れませんよ

刹「ああ！」と俺はピイイイイーと口笛を吹いた。すると、

バアサと一匹の鷹が飛んできた。そして、俺の腕に止まった。そして、鷹の足にある小さい筒入れに手紙をいれた。

刹「これを父上のところにもっていてくれ」と言うと鷹は高く飛んでいった。

それを見届けた俺は皆に指示をした。

刹「これより啄木鳥戦法から裏啄木鳥戦法にいこうするよいな！」

全「「「「「はっ！」「」「」」」」

さて戦はこれからだ。

信玄 side

ワシは今本陣で左近と甲斐姫と謙信が来るのを待っていた。

左「今頃、若の隊が山頂に着いたころじゃないですか？」

信「ああ、じょうつなこのあと何にも無ければ楽ができるじゃないかな」

甲「変なこと言わないでください。お館様」

信「グハハハハア、イヤイヤすまんのう」とワシが甲斐姫に謝ると話題を変えて見た。

信「ところで甲斐姫は刹那とはどこまで進んだかね？」

甲「な、ななに言ってるですか、お館さま！？／／／／／」と顔を赤らめて声をあらげて言った。

信「イヤ、なに結構うまくいってるから少し聞たかったんじゃ」

甲「いや、まだ、そ、その、け、結構うまくいってますよ／／／／／」

顔赤らめてそう言った。うん、かわいいのう

信「そうか、そうか、これなら速いうちに孫の顔が見れそうじゃな」

甲「ま、孫って、もう！お館様！」

ワシと左近は大笑いしてしまった。じゃが、こういた若者の人生は一番大切じゃ、しかし、今は戦国の時代こういった。若者たちを戦いにだしてしまう、まったく自分の無力さにあきれてしまうよ

左「信玄公、大丈夫ですよ」そう考えていると左近がなにかを感じたのかそう声をかけてきた

左「若が言っていました。「この道は自分で選んだことそして俺は生きて未来を作るために俺は戦うんだ。それに、家族が苦しんでるところは見たくないです」って前に言っておりましたよ」

まったくワシは幸せ者じゃこんなにも息子に愛されているとは、しかし、刹那はものすごく成長した。武力・知略も間違はなく日の本でも上にあるじゃろうな、だが、一番なのは心の力が強くなったと思っのう

信「そうか、刹那がそんなことをそんじゃワシも頑張ってみようかね、おことたちの未来のために」

左・甲「「はい！」」

二人が返事をする空から一匹の鷹が降りてきた。足には小さい手紙があった。ワシはその手紙を取り鷹にはお礼として生肉をくれた。鷹はうれしそうに食べていた。ワシはその手紙を見て目の色を変えた。

左「どうしました。信玄公？」

ワシは無言で手紙を左近に渡した。

左「失礼します。！？、こいつは、若の読みあたりましたね。

甲「え、てことは！？」

信「うむ、これより全軍、啄木鳥戦法から裏啄木鳥戦法に変更する。皆、準備にかかれ！」

左・甲「「はい！」」

さーてあの戦好きを叩いて見ようかね

信玄 side out

第6章 中編（後書き）

戦国無双3は、やっぱりおもしろいです。

ガラシヤかわいいよガラシヤ、そういえば、そろそろ三国無双6が発売されますね私も断然買います。

次回ですが川中島の戦い後編です。

では、次回までさらば！

第6章 後編（前書き）

お待ちどうさまです。川中島の戦いのラストです。
今回はキャラ崩壊と新キャラがでます。では、どうぞ

第6章 後編

左近 side

俺と甲斐姫は若が送ってきた手紙に従いある準備をしていた。

左「しかし、まさか、こんな物を作っていたとは若には恐れ入りますよ」

俺は始めてそれを見た時、頭が真っ白になりかけた。

なぜ、こんな物があるのかと思いましたが。だが、これで敵の足並みをくずせる。そうすれば、この戦の勝機はこちらに傾くだろう、しかも、こいつの短所といえる部分を補うように手を考えていたとは、若に驚されましたよ。

左「まあ、これがうちの作戦通りに行かないと意味無いんだけどね」

甲「もう、左近さんそんな縁起でもないこと、言わないでくださいよ刹那さまや皆で力を合わせてここまでやっただんですから。」

左「ああ、わかってるよ、しかし、今回えらく気合が入ってじゃないか？」

そう、甲斐姫や鈴音は今回の戦に妙に気合が入っていた。

甲「いや、何か今回の戦はどうしても勝たないと刹那様に危険が及ぶと思うんですよ。」

と言うとなんか背後に毘沙門天の化身見たいなのが一瞬見えた気が

した。

しかし、また、若がらみですか、これが出ると必ずややこしいことになるですね。

いつか、若が後ろから刺されないよ祈つときですか、

左「そんなじゃ、さつさと準備にかかりますか、左近隊はこれより若の指示通りに準備をする！甲斐姫隊

も準備にかかれ！」

甲「わかりました。皆、いくわよ！」

兵「『ハッ！』」

さて、これからだ、若や皆の歩みが進むか此処で終わるかどうかの
大博打の幕開けですは。

左近 side out

秋深まるこの八幡原に白き霧が出ていたその中に白き鎧の集団がいた。

そう、この集団こそが上杉軍の先鋒そのものである。

上杉兵「隊長このまま行けばあと少しで武田が待っているところに着きますね」

上杉将「ああ、皆、再度、装備の点検を霧が晴れかけて来たら先手を打つぞ」

上杉兵「しかし、隊長、大丈夫何すかね、相手は甲斐の虎とその息子で甲斐の獅子って言われる人物たちなんですよ」

上杉将「まあ、そうだが、そんなこと考えてもしかたないだろ。俺たちはただ、謙信様たちを信じるだけだ、ほら、さっさと準備を急げ」

上杉兵「」「」「ハッ！」「」「」

そんなことをしているうちに伝令が入った。

伝令兵「報告！まもなく、霧が晴れかけてきました。」

上杉将「よし、これより武田の先手を打つ、行くぞ！」

上杉兵「」「」「オオオオッ！」「」「」と上杉軍の先鋒は真っ直ぐ武田軍の陣へ向った。

このとき先手を打ったと上杉軍先鋒は誰もが思ったが・・・

「ズドオン！！」と静寂を破るような雷鳴の如き轟音が鳴り響いた。

破局は突然来たのだ。

刹那 side

「ズドン!!」と轟音が鳴り響くと森が揺れ木に止まっていた鳥たちも騒ぎ始めた。

幸「兄上これは」

刹「ああ、俺たちも急ぐぞ!」

全「『『『オオツ!』』』」

鈴「ガッテンでい!、刹那さま私がんばりますよ!」

鈴音は気合よく答えた。

刹「偉く気合が入ってるな、どうしたんだ?」

鈴「はい、何か女の勘見たいのものがこの戦は何か刹那さまに何か起こりそうな気がするんです　よ?」

刹「そうなのか?まあ、俺も気づけるが鈴音も頑張りすぎて無理をするなよ。」

鈴「はい!わかりました」

刹「よし、みなこのまま、一気にいくぞ八幡原に出る合図は左近の隊の攻撃終了後に突っ込むぞ!」

全「『『『ハッ!』』』」

刹那 side out

左近 side

左「よし、敵の足を扱けさせたな急いで、玉を込めろ！」

武田兵「ハッ！」

左「連弩隊構え、敵に休む暇を与えるな！」

武田兵「ハッ！」そう言うところスボウより少し大きめの物を持った兵士たちが一斉に敵に向かい矢を撃った。

そうこの戦で若が俺に託した物は三国志で希代の名軍師と言われた諸葛孔明が作ったと言われる。

「連弩」を若が改良し装弾数を倍増しており、また、威力も当たりがよければ鎧を着た兵士を貫通するほどの威力になった。だが、これは、あくまで、本命の武器を使う時間稼ぎである。

武田兵「左近様、玉、装填完了です！」

左「よし！鉄砲隊構え！」そう言い放つと陣の前に設置した。3つの柵に入る鉄砲を持った兵士たちが一斉に構える。そう、これこそ、若がこの戦を決める切り札「鉄砲」である。

作戦はこうだ、まず若たちの部隊が妻女山に行き敵が入なければ敵にけどられないよう鷹を使い本隊に知らせる。そして、敵が八幡原に来たら鉄砲と連弩の交代撃ちで敵の出鼻をくずき、そこを甲斐姫率いる伏兵が左右から敵に攻撃をかけそして別働隊がそこに加わり

一気に決着をつける。

敵も俺たちの裏をかいたと思ったと思うが結局はそれにまたこつちが裏をかいたことにより啄木鳥戦法は成功に道びいた。これぞ、裏啄木鳥戦法である。

左「撃てー！ー！」

ズドオン！とまた鉄砲が火を噴いた。

上杉兵1「ぐあっ！」

上杉兵2「ぎゃっ！」

上杉兵3「ぐわっ！」と鉄砲の餌食になる上杉兵そして、玉を込める間を連弩と柵で食い止めて玉を込めをえた鉄砲で撃つそれお繰り返し鉄砲を5発撃ったところで打ち方をやめさせた。

左「撃ち方やめい！伏兵に合図のホラ貝をふけい！」

とホラ貝が吹くと左右から伏兵が混乱になっている敵に切り込んだ。

左「俺たちも行くぜ！続けえ！」

そう言つて俺たちも敵に突っ込んだ。

左近 side out

俺たちが急いで馬を走らせそしてやつと山を下し八幡原に着きそして、敵の背後を突いて

上杉兵「ほ、報告！て、敵の援軍が我が軍の背後からきました。」

上杉将「な、なに！なぜきずかなかった！」

俺は兵士の伝令を馬で聞いている敵将に突っ込んだ。

刹「その将！俺と勝負せい！」俺はすかさず武器をだした。

上杉将「な、なにを！小童が返り討ちんにしてくれん！」

将も俺に気づきすかさず俺突っ込んだ。だが勝負は一瞬で決まった。

俺はその敵将の刀を獅子輝剣で折りそのまま将の胴体を切り胴体が半分になった。

刹「敵将、この武田刹那が討ち取ったー！」

そしてそこから乱戦に突入したが形成はこちらに傾いていた。だが、少し可笑しいことがあった。

刹「幸村いたか！」

幸「いえ、どこにも謙信公らしき人物は見当たりません。」

俺と幸村で敵を駆逐していた。

幸村の槍が電光石火の如く敵を突きあるときは切り裂いていた。

俺も切ったりぶっ飛ばしたりしりして、敵兵の腕や足があり得ないほうに曲がったりしていた。

刹「しかし、どうしてだ？なぜ、謙信公もいないがああ二人もいないんだ。」

そう考えていると鈴音が慌てたようすで報告にきた。

鈴「報告します！海？城に敵襲であります！」

幸「なに！どこの敵部隊だ！」

鈴「はい、それが」

伝令兵「報告敵の援軍が善光寺からきました。」

刹「なに！」と俺も驚いたまさか、ここでも歴史がかわっていると
は、そんなう考えていると

急に一人の若武者が来た。その人物は

刹「兼続か……」

兼「おお！これは、先生こんなところで会うとは」

そう、この頭の兜に大きく「愛」と着けて鎧の背中にも「愛」が描
かれておりやや落ち着いた渋みのある声をする若武者こそ
若き家老「直江兼続」なおえかねづく」である。

刹「ひさしぶりだな兼続！元気でいたか？」

兼「はい！先生や謙信公を超えようと日々励んでおります。」

刹「そうか、やはり、海津城の奇襲してる将は」

兼「はい、謙信公であります。」

やはりか、まさか、このような大胆勝つ危険な方法で来るとは、
この戦は左近さん甲斐ちゃんの部隊が本命のため父上の部隊は少な
くなっており、また、国内の警戒も少し手薄な所が出てしまった。
多分そこを突かれたんだろう。

刹「まあ、再会は嬉しいのだが俺はこれから忙しいだ悪いが行かせ
てもろうぞ」と神月で父上の救援に向おうとした。

兼「すみませんが先生！あなたを謙信公のもとへ行かせるわけには行きません！」と兼続は自分の武器「伏鬼兼光」「ふつきかねみつ」と一緒に持っていた護符を俺に向け投げその護符が変形し鋭い矢になり俺を狙ってきたが、

幸「炎よ！」すかさず幸村が文字力で炎を纏った紅牙飛燕ふり護符を全て焼き尽くした。

幸「兄上ここは私にお任せよ！早くお館様のもとえ！」

剎「わかった。ここは任したぞ幸村！」俺は神月を走らせた。

兼「くっ！行かせはしませんぞ。」と兼続が行くが幸村がそれを阻む

幸「ここからは一步もとうしわしない！真田幸村まいる！」

兼「ならば、押し通るまでよ！直江兼続まいる！」

若き二人のもののふがぶつかった。

俺は神月を走らせ武田本陣に入ろうとしてた。海津城に行くためにはここを行かなければならない。

そうしているうちに本陣に入った。だが、本陣の中には一人の女性が立っていた。

神秘的な美しさを放ち純白の着物がまた、神秘的な美しさを引き立てて足もと黒のロングブーツを履いており髪形は昔ながらの垂髪でそれの上にフード被っている。また、肌も雪の如く白く顔も整っておりその顔から出る笑みは俺に向っていた。

この女性こそ上杉の女神、謙信の姉「綾御前」「あやござん」

俺は神月を止めた。

刹「あ、いえ、御前様お久しぶりです。」と降りて挨拶をした。これは避けては通れまいと思ったためである。だが、俺の挨拶がいけなかったのか顔は少し残ねそうな顔をしていた。

綾「刹那、御前様とそんな硬く言い方は入りません。いつものように綾と読んでください。」

少し涙目にもなっていた。

刹「わ、わかりました。では、綾さんお久しぶりです。お元気そうで何よりです。」と言い直し笑顔を向けながらいった。

綾「ああ！やはり、貴方の笑顔は眩しすぎます／＼／＼／＼」と誰が見ても真っ赤な顔していて、少しふらつきが見えた。

刹「綾さんがここにいるということは俺の足止めですか？」

綾「それもありますが、一番は可愛い刹那を見たいと思い待っていました。／＼／＼／＼／」

刹「か、可愛いって、俺なかより、ずっと綾さんの方が可愛いし綺麗ですよ」

綾「まあまあまあ／＼／＼／」と両手を真っ赤になった顔につけて、腰振っていた。

俺が上杉でお世話になった時はすごく綾さんにお世話になったが、ただ、少し、いや結構行きすぎなところもあった。その話は後々話

そう。そう考えていると綾さんがトリップから復活していた。

綾「あなたの一言一言でこんなにも私の心は乱されてしまうなんて
／／／／」

まだ、自分に酔いしれているなと思っていると綾さんはとんでもないことを言いだした。

綾「やはり、貴方と私は結婚して夫婦になる運命なんですは／／／
／／」

俺はズッコケかけたが何とか踏ん張りツツコミを入れた。

刹「い、いや綾さん別にそんな「ちよつと待ったー！？」
とどこから出てきたのか鈴音と甲斐ちゃんがでてきた。

甲「なんなのよあんたはあんた見たいな自分の世界に入るヤツに刹那様はぜー！ー！ったいわたさにからね！」

鈴「そうだよ、それに表ではそうだけど裏じゃこわーい人に刹那さまと夫婦になる資格なんてありませんよーだ」

綾「うるたえ者たちよ刹那はそれを含めて私を受け入れてくれた。大器ある人物です。あなたたちのような小娘どもには勿体ですは」

鈴・甲「何ですってー！」と三人に何かオーラのよな巨大な力を感じて体が思うように動けなかった。

甲「刹那様こいつの相手は私たちに任せてください！」

鈴「そうです！刹那さまは速くお館様のもとへ！」

刹「あ、ああ、わかった！ここを任したが無理はするなよ！」

鈴・甲「はい！」俺は神月に飛び乗って走らせた。

綾「ああ、刹那！」

刹「綾さん！また、ゆっくりと話でもしようね！」と俺は城を指した。

綾「あなたがこなければ刹那の愛を堪能できたものをここで倒して差し上げましょう。」

甲「それはこっちも同じじゃー！」

鈴「ここでアンタを倒して刹那様に近づくにはしないよにしたあげる！」
ここから、三人の恋する乙女の熾烈な激戦が始まった。

刹「まさか、嫌な予感とはこれとは、あとで詰め合わせを考えないと、だが、今は父上を助ける方が先決だ。」と神月の速度を上げたそして、城に着いて見たものは馬に乗った謙信公の七支刀の姫鶴一文字「ひめづすいちもんじ」を振りかざし父上が軍配風林火山・序「ふうりんかざん・じょ」で受け止めがぶつと飛んでしまい、そこを謙信が見過ぐすはずも無くすぐさま父上に斬りかかった。

刹「父上！」俺は獅子輝剣を謙信の姫鶴一文字にぶつけその反動で獅子輝剣が俺の手元に戻った。

そして、神月から飛び降り父上の前にたった。

刹「父上ご無事で？」

信「ああ、いや、息子に」かつこわるいところ見せちゃったね。」
そう言つて風林火山をとった。

謙「刹那、久しいな」

刹「はい、お久しぶりです謙信公」

謙「姉上には会ったか？」

刹「はい、相変わらずでしたけどね。」

謙「そうか」と表情を変えずに答えた。今の謙信の戦国無双の格好をしていた。

刹「どうしますか？これから一戦やりますか？」

謙「否、今日はここまでとしよう宿敵と刹那の軍略はまさに美酒の美酒であつた。また、ちそになるぞ、ハッ！」と馬を走らせ謙信は後退した。

信「やれやれ、まだ、足りないというかね。ワシたちもうお腹いっぱいなんだけどね。」

刹「まったくですよ」

その後上杉軍は撤退をした。その後俺たちは海津城に集まつた。

信「皆、今回の戦大儀であった。これでうるさい謙信も少し黙っているじゃろな」

左「まったくですよ、しかし、今回は若の軍略とあの兵器、一体どこで鉄砲なんて作り方したんですか？」

剎「まあ、ちょっと知り合いに鉄砲に詳しいヤツがいてそいつからおさりました。」

左「そうなですか、じゃーあそこでなんかあやばい雰囲気を出している二人はどうなですか？」汗

その二人とは鈴音と甲斐ちゃんである。二人は綾さんと激闘の末引き分けに終わった。また、二人の武器もボロボロでまた、俺が見たとき服もボロボロに近いものになっており、

もともと二人の服は露出度がある服のため胸の全体が見えそうだったので俺は二人に半纏を二つ着せた。今はもう新しい服に着ている。

剎「とりあえず、ここからですよ俺たちの新しい時代が来るか来ないは」

そう言うのと皆頷いた。この戦いを気に武田の怒涛の快進撃が始まることを誰もが予測していた。

ただ今は秋風が川中島の戦いの終わりを告げるように穏やか吹いていた。

第6章 後編（後書き）

どもーです。やっと川中島の戦い編完結です
ここまで書くのに苦労したぜ
次回は新キャラと自分が考えたオリジナルの話になります。
では、またあいましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376p/>

戦国無双 甲斐の獅子

2011年3月24日03時30分発行